



DV被害女性と同伴子の一時避難施設・シェルター内部。支援によって基本的な生活をおくることができる。(写真上・下)入所中、同伴子は学校や幼稚園に行けないので、保育士がケア。「FTC」のコーディネーターとカウンセリングの打ち合わせをしていた(写真左)



## 市民活動の新たな挑戦

いろいろな悩みや不安、難題を抱える人たちを支え、問題解決に積極的に取り組む市民活動は各地ですそ野を広げている。ファイザー製薬ではヘルスケアの分野の市民活動を支援し、その社会的認知を高めることを目的に、2000年から助成プログラムをスタートさせた。過去の実績にとらわれず、活動のユニークさと将来性に評価の重点を置いているのが特徴。2001年度の助成対象となった各プロジェクト(左頁参照)を中心に、9回連続(今回は5回目)でレポートする。

# 安全を確保し、生活を支援するほか 深い心の傷の回復を継続的にケアする

FTCシェルター

## DV被害女性及び同伴子の緊急一時保護事業(東京都)

配偶者やパートナーからの暴力、いわゆるDV(ドメスティック・バイオレンス)が、日本でも社会問題化したのは、ここ数年のことだ。だが、これは実態が表出しただけであって、DVについての相談はすいぶん前から多く寄せられていたという。

「90年代半ばには、殴られてケガをした」といった相談を多く受けていました。なかには「50年間ずっと暴力を受けている」といったひどいケースもあった。でも、相談員は話を聞くだけで何もすることができなかったのです」

女性センター相談員のコーディネーターだった平川和子さんは、DV被害者の緊急保護施設の必要性を感じ、相談員たちとともに「FTCシェルター」を設立。97年3月のことだった。以来、5年にわたって単身・母子家庭合わせて約120組を保護、支援している。

被害者の緊急的な安全確保がメインの活動だが、幼い子供を抱えながらの先長い年月を生きていく被害者のために、就職や資格の取得、病気などで働けない人への生活保護申請といった生活支援も行っている。

また、設立メンバーがカウンセラーと相談員である特徴を生かした心のケアプログラムも提供。シェルター避難してきた被害者は例外なく、長期間の暴力や虐待によって心の傷を負っている。恐怖と絶望感のなかで自分を否定し、感情を麻痺させることで生き延びてきた現実が、その背景にはある。

「被害体験も含めて自分のことをありのままに話し、また、同じような体験をしてきた人たちの話を聞くグループカウンセリングや個人カウンセリングを継続的に行うことで、人間としての尊厳を取り戻し、自分の生き方を決めていけるようになります」

また、設立メンバーがカウンセラーと相談員である特徴を生かした心のケアプログラムも提供。シェルター避難してきた被害者は例外なく、長期間の暴力や虐待によって心の傷を負っている。恐怖と絶望感のなかで自分を否定し、感情を麻痺させることで生き延びてきた現実が、その背景にはある。



FTCシェルター代表の平川和子さん。「安全保障の問題も含め、DV被害者の切実な声を社会に届けるのが私たちの役目です」

「そういう意味では現在の法律はまだ不完全で、DV被害者を取り巻く環境も整備されているとは言いがたい。全国のシェルターや公的な機関とのネットワークをさらに広げて、DV問題への意識が深まるように働きかけていくつもりです」

# こんな生きづらさを持つ子供たちが いることを知ってほしい

岡山県高機能広汎性発達障害児・者の親の会

## 高機能自閉症児のケアと自立をサポートする(岡山県)